

石黒達昌論

和田 勉

一

石黒達昌の文学では、医者であり遺伝子の研究者である^{註1}ということから、医学や分子生物学に関わるテーマが特に表されていく。盛り込まれた内容は、いわゆる文学的なものを意図的に拒否し、それ以前の文学の価値観や美意識に対して「異化」を試みていると言える。また、理系の作家らしい論理的で緻密な言語観が窺える。

石黒の文学が、分子生物学^{註2}に関わることで、これまでの文学とどのように変容しているのか明らかにしたい。変容の実態を探ることで、石黒の文学の意義も、より明瞭に説明できるはずである。遺伝子というものに焦点を当てて分析するこ

とで、石黒の作品の抱え込んでいる主題や構造が明らかになると思われる。ただし、読む側が初めから分子生物学の視点を設定して「文学」を対象化することによる、視点の自己目的化という陥穽は避けねばなるまい。そのため、あくまで石黒の文学の特質を論じることを中心にする。

石黒の小説の中では、遺伝子を素材とした「平成3年5月2日、後天性免疫不全症候群にて急逝された明寺伸彦博士、並びに、」(平5)「今年の夏は雨の日が多くて」(平5)「†」(平6)「新化」(平8)を主に採り上げることにする^{註3}。

小林幸夫は、「終焉——石黒達昌」(『国文学』平8・8)の中で、「『今年の夏は雨が多くて』の中の、『知りたいのは座標軸です。自分は何によって規定されているのか。』、これが石黒達昌の根本的な〈問い〉である。この哲学の範疇にも属する〈問い〉の〈答え〉を、『我々の意志とは無関係に、DNAの意志がゆつくりと、しかし確実に実現されてしまうかも知れない。』(『平成3年5月2日、……』)と、生物学の範疇において求めたところに、彼の小説の基点がある。この〈答え〉が、R・ドーキンスが『利己的な遺伝子』で示した考え、『我々は遺伝子を保存し未来に運ぶための容れ物に過ぎないのだという仮説』に拠っていることは、作家自身によって説明済みであり、この〈答え〉そのものは現在では格別新しいもので

はないのだが、石黒はそこから一步踏み出して、DNAには自己崩壊のシステムが内包されていて、生態系を乱す人間を葬り去ろうとするDNAの『意志』があるのではないかと想像する。ここに石黒の固有のテーマがあり、その文学上の新しさも存するのである」と述べている。遺伝子が中心であるとするならば、現代人は自己のアイデンティティをどこに求めればよいのか。石黒の文学は、確かにこの命題に執拗にこだわっている。

どの作家の作品の背後にも、それを支える作者の動機と情念とが存在している。同じように、読者の立場から言っても、読み手の側の必要と欲求があり、それをもって作品と出会った時の感動が、批評や研究の出発点である。作家の表現という営みの内実を作品そのものの中に探りながら、石黒の文学の本質を明らかにしたい。また、分子生物学において唱えられている説を踏まえて、どのような文学的な想像力が働いているかについても検証したい。^{註4}

二

「平成3年5月2日、後天性免疫不全症候群にて急逝された明寺伸彦博士、並びに、」では、従来の作品のような表題が、

付けられていない。表題というのは、文学作品を考える上で最も基本的なコードであり、これがなければ、読者は、その作品が名付けられていないということに不安を持つことになる。この作品では、冒頭部がそのまま表題に用いられている。これは、石黒の他の作品にも見られる特徴である。冒頭部とは、小説世界への導入部であり、読者にとってみれば、そこを読むことで、作品の世界に足を踏み入れていくために、必要なコードを獲得していく場である。そこがあえて表題として示されているというのは、暗示的な、象徴的な表題を石黒が嫌い、^{註5}そのまま作品への導入を図ったもので、奇を衒ったとも言えよう。

冒頭の一文には、しばしばその物語が形作る世界がミニチュアとして描き出されている場合が多いが、石黒にも、それは当てはまる。「平成3年5月2日、後天性免疫不全症候群にて急逝された明寺伸彦博士、並びに、」では、急逝した明寺及び榊原の実験日誌と関係者の証言を踏まえて、話が展開することになる。ただし、「後天性免疫不全症候群」については、奇を衒って読者を引き付けようとした意図が窺われ、表題に記されるほど重要な要素とはなっていない。実際に、明寺の死因については、本文の中には具体的に出て来ず、エイズで亡くなったことは分かっても、その経緯についてまったく記

されていないので不充分的誇りを免れまい。「後天性免疫不全症候群」は、明寺とのつながりには欠けるが、生殖行為が死に直結するハネネズミの生態とは共通するところがある。柘植光彦は「すばる」(平6・8)の中で、「この小説の新しきは、エイズに直面した現代の人間の生を、『ハネネズミ』というユニークな架空の小動物になぞらえて表現した点にある」と述べ、エイズに直面した現代人についての寓話として捉えている。だが、作品の中に描かれたヒトの姿は、あくまで絶滅する動物を守ろうと悪戦苦闘しており、その私生活などは描かれていないので、そのように読むには無理なところもある。

石黒は、座談会『理科系の文学』旗揚げ宣言(「中央公論」平8・5)の中で、この作品について、「トキがもうすぐ絶滅する」という話を聞いて非常に悲しく思っ、そういう話を書いてみたいと思っていました。それでトキではなくて何にしようかと考えていたときに、たまたま自分が実験室でよく殺していたネズミが頭に浮かんだんです。科学のためとはいえないたまたまれない気持ちはある。何かそういう実験動物を使っているときの悲しさまみたいなものと、トキという動物が絶滅してしまう悲しさが渾然一体となって、ネズミに羽が生えちやっつたんです」と述べている。この執筆動機には、センチメ

ンタルともとられかねない要素が含まれているが、作品では、それをあえて押さえて、ハネネズミの生態をドキュメントとして硬質の文体で綴ったところに、優れた成果が認められる。また、ハネネズミの絶滅に至る過程を推測するという、推理小説仕立てであることも、迫真性を高める上で効果的である。

なお、巻末には信憑性を高めるために、参考文献まで付けられているが、この参考文献には実在しないものも含まれている。例えば、「北空知新聞」の一九八三年一〇月五日「ハネネズミをめぐる混乱」や一九八九年九月一日「ハネネズミの絶滅」という記事は、「北空知新聞」には掲載されていない。また、「科学通信」一九九〇年七月号に「ハネネズミという生物」という論文が載っているかのように記されているが、この雑誌は実在すらしておらず、フィクションである。

この作品の語り手で主人公である「私」は、「医業の傍ら文章」も書き、ハネネズミの絶滅について関心を持っていた。作品の背景である「神居古潭」という空間も、絶滅する謎の生物が存在する場所としてふさわしい雰囲気醸し出している。アイヌに所縁の地名が舞台であることと作品の内容との関連から、かつて和人の乱獲によって鹿や鮭が減少したということなどがすぐに想起されるが、作品の中では、民族の問題が展開されるわけではない。それでも、この空間は、希少

生物の棲むことができる場所として、小説の展開における重要な要素となっている。^註この場所は両義的であり、ハネネズミを守ってきたと同時に、他の侵入者には敵対的である。なお、ハネネズミが絶滅したのを見届けた後、榊原が新聞に寄せたコメントに、「何千年何万年の種のエネルギーが消滅した瞬間を感じた」とあるが、はるかな昔から受け継がれてきた遺伝子の〈時間〉が、更に説得力をもって描き出されていれば、より独自性を持ち得たであろう。

「明寺氏に來た環境庁からの依頼の内容は、生殖を諦めた後、なんとかハネネズミの皮膚の一部を採取して細胞、遺伝子レベルでの種保存をはかれないかというものだった」とあり、明寺は引き受けることになる。そして、「ハネネズミが遺伝子レベルでも、細胞レベルでも、個体レベルでも、全て消失の方向に向かっていることに異常なまでの興味を示し」『仮説として、死というベクトルを持つ生物の輪郭が出来上がっていた』ということになる。

ハネネズミが、涙を流すことや闇の中で発光するという、フィクションに上塗りした作業も、不自然でなく描き出し得ている。このような文学的な要素も、あくまで実験の経過の中で偶然見つけ出したということになっているため、臨場感があり、説得力もある。^註

榊原が死に臨んで「私」に伝えたかったことが主題となっているが、要するに、絶滅する動物の最期を見届けるまでの悲劇であろう。母胎から出て來た唯一匹だけの仔ネズミを、明寺は絶望的に始末してしまう。榊原がワープロに残した「こどもの」の後に続く言葉は、こどものハネネズミが一匹だけ残されたとしても、種の絶滅はもはや不可避であっただろう、というようなことであろう。

「今年の夏は雨の日が多くて」の中には、「過去の自分を既に死んでしまった人間として処理して」『未来の自分は一体何によって規定されているのかを追求すると、脱出不可能な迷路の中にはまりこんでしまう』主人公の近況が、書簡体で綴られている。

「一時は人間のハードの部分、つまり遺伝子なるものに興味を持って、そこに根拠を求めたりもしました。確かにある部分は、初めから本能という形で我々の中にインプットされているのです。遺伝子の塊であるあなたという存在が、遺伝子を広めようというのが人間の本来持っている生存の目的だという今流行の説です。子供が六カ月でおすわりをし、一年で歩くというのは明らかにプログラムされたものでしょうし、他人と競い合っている会社に就職するとか、きれいな恋人を選ぶとかいったものも全て自分の遺伝子を有利な形で保存す

る目的論にかなっているのです」とある。ここでは、遺伝子を広めることに生存の目的を認めているところに特質がある。また、体内の遺伝子によってプログラムされたものを、「人間のハードの部分」と捉えているところが独特である。このような考えを持つ主人公が、自己のアイデンティティをどこに認めるかということで、自分探しを行っている。

主人公の「私」はC型肝炎に罹っていて、病気と一生付き合っ行って行かなくてはならないことにやりきれなさを覚えていく。ただし、病気の方に収斂していくのではなく、あくまで「私」のやりきれなさの要因の一つとして描き出されている。「私」は、自分が平均的な人間であることに悲劇を覚えているが、この肝炎だけでも存在意義となり得るわけで、その辺りの説明は充分に為されているとは言えない。「私」の告白のきつかけとなつたものを病気として設定したが、告白自体は別の内容に移っているからである。

ところで、書簡も一種のドキュメント形式であり、他者に宛てて思いつくままに綴ってはいるが、主人公「私」の自問自答が描かれていると見てよい。それは、書簡の相手への親愛は窺えても、相手が読者一般に拡散してしまい、どのような人物か捉え難いことにも起因しているように。

「十」の中には、手術を担当した医者意識と、手術を受け

て死んでいく同僚の医者意識とが絡み合うように描かれている。後半になるにつれて、その度合は深まり、どちらがどちらなのか、分かりにくくなる。

細胞を検査されている同僚の医者意識として、「無数の細胞の中のたった一つにさえ、自分の『全て』が書き込まれている。無数の細胞は互いに互いのコピーなのだ。そこに分担はあっても、『個性』は存在しない。二重螺旋の設計図から『個性』を持たない自分のハードを再生することは『可能』だ。

(中略) 遺伝子の多様性は四種類の塩基配列の無限乗個だが、時間軸を無限に設定すれば、それは有限値に収束する。私の『ハード』が、いつか『復活』することは証明された事実なのだ」とある。人間は、遺伝子の組み合わせによって成り立っており、復活することさえ可能だという認識を持っていることが分かる。また、現在どのような手術を施されているか分かる故に、患者である医者意識は活発に動いている。

この医者と患者は、毎日「細胞死」つまり「アポトーシス」の研究も行っていた。だから、この医者は、手術をしながら、「DNAの中に死は書き込まれているのだ」と思い、「契約書の中の生の横には死が書き込まれているのだ」とか「自分の本質は死なのだ」という意識に苦しむ。また、「人間を正常ではない状態にすることが恐ろしい。喉にあげた穴から空気を

送り込むという事実は既に強烈な恐怖の正体だ」というように、患者に恐怖を覚え、「加害者」の意識に怯える。

ところで、作品の中の独特な表現については、「Q」は、癌細胞を表しているのであろうし、空白の一字の箇所は、周りの人間達による無言の圧迫を表しているのであろう。また、黒い点々で表記された箇所について、青野聰は「群像」(平6・5)の「創作合評」の中で、「脳死状態、もう意識がなくなつた」ということを表していると述べているが、どうであろうか。黒い点々の直前の医者のカルテに、「肝不全、呼吸不全は不可逆的なものに変化しつつある」という記述があることに拠つて判断したのであろう。確かにここを境に、患者である医者の意識は死の領域に近づくが、この後でもまだ患者の意識は、自己の死までの状態を冷静に分析しているので、「脳死状態」とまでは言えまい。このような表し方や、十字架を意味する表題の「十」の表し方は、奇抜ではあつても、文学の表現としては問題も残ろう。言葉による表現ではなく、記号による表現に頼り過ぎ、どこか謎解きのようになっているからである。なお、表題の「十」の意味は、死と生の境で、医者「私」が神であるという茶番劇を演じていると自覚するところにある。

「新化」は、「平成3年5月2日、後天性免疫不全症候群に

て急逝された明寺伸彦博士、並びに、」の続編とも言える作品で、絶滅したハネネズミの解明に取り組む姿が描かれている。石井は、保存されていたハネネズミの臓器から抽出された遺伝子の解析を行うことになる。そして、「人間における一卵性双生児のように、全てのハネネズミは一つの遺伝系のコピーであり、遺伝的個体差はなかった」という説を唱える。つまり「遺伝的に全く同一な個体」、クローンだったというのである。生息数が激減した動物では、近親交配を余儀なくされるという例も挙げることで、信憑性を持たせている。

石井は、「ハネネズミという極めて例外的な小動物は独自の体系を持つていて、進化と相反する方向性を持っているように思えます。つまり、純系化は単一性につながり、種全体の保存にとつてはむしろ不利だと考えられるわけです。しかしながら他方、純系化した個体はどれも全く同一であり、自己の保存という面からは永遠性を保証されています。自然界での純系種出現は自己の保存を目的としながら、自己の死をも意味し、絶滅につながる矛盾したものと云わざるを得ません」と学会で発表してもいる。ここに、表題に記された「新化」の意味が示されている。「進化」に反して、「純系化」に向かったというのである。これは、例えば、クリストファー・ウィルズが『遺伝子の知恵』(平5、白揚社)の中で記した、「も

しある生物がその環境にみごとに適応したとするならば、その生物自身と正確に同じ遺伝子コピーを作ることが最も賢明な戦略となるだろう」というようなことを発展させたものであろう。

石井の説として、「進化の過程というのは単に遺伝的な多様性を持つ生物を作り出す過程であって、高等で複雑な方向が進んだものであるというわけではない。現に最も原始的な生物であつても細菌は滅んでいない。恐竜の死滅も爬虫類全体の死滅を意味するものではなかった。逆に、環境の変化によつては人間も含めた高踏生物全てが死滅することもありうる。むしろ核戦争後には、細菌などの単細胞生物だけが生き残る可能性の方が高いのである」と記されている。つまり、ダーウィンによつて体系づけられた進化論のように、単純微小な生物から「高等で複雑な方向」に進化したという考えを否定している。そして、「遺伝的な多様性を持つ生物を作り出す過程」として捉えている。このような理論は、一般にも受け入れられており、例えば、中村桂子の『生命誌の扉をひらく——科学に拠つて科学を超える』（平2、哲学書房）の中に、「多様性こそ生命体の特徴」と記されている。

「新化」の中に、「我々分子生物学をやっている人間は、発想の基本に、便宜的な神の存在を前提にしているところがあ

ります。はつきり言ってしまうと、多くの研究者にとって神というのは遺伝子そのものなわけです。先生の議論の中にはよくドーキンスが反面教師として出て来るんですけども、とにかく先生は一貫してドーキンス理論に懐疑的でした」とある。石井の説の独自なところは、「多様性から純系という単一化に向かい、絶滅によつて遺伝子の消滅を目指すハネネズミは、*selfish gene* 説の実証的な例となる可能性があつた」というところにある。石井の「実験ノート」という形ではあるが、ドーキンスの『利己的な遺伝子』への反論がなされることになる。石井はハネネズミをサンプルとすることで、「従来の生物学体系を覆す可能性」を考えていたのである。

「先生（石井のこと——引用者注）は、分子生物学が基本的に持っている方向性、つまり、思考や感情なども含めたあらゆる生命現象が物質レベルの出来事に還元できるということに、何の疑いも持っていませんでした。遺伝子レベルでの再生を図ることで、あらゆる死は生に変換可能だという信念のようなものすら感じられました。生物学を分子レベルに還元して、精神の働きを物質とエネルギーの作用に分解すれば、あらゆる死は完全に抹殺可能なものだという信念です」とある。「思考や感情なども含めたあらゆる生命現象」を、遺伝子

の働きと捉えることが可能だとしているところに、石井の考えの特質がある。ひいては、遺伝子に焦点を当てた石黒の文学の特質があると言える。

三

次に、単行本の「あとがき」を手がかりとしながら、石黒と分子生物学との関わりを更に明らかにしたい。

『平成3年5月2日、後天性免疫不全症候群にて急逝された明寺伸彦博士、並びに、』の「この本を読まれた方へ」の中に、「なぜ人間は生きているのか?」というのは非常に重いテーマだが、分子生物学をやっていると、研究者の間ではなんとなく共通の認識のようなものは出来上がっているように思われる。名著『selfish gene』の中でも示されているように、我々は遺伝子を保存し未来に運ぶための容器に過ぎないのだという仮説がそれだ」とある。分子生物学者としての石黒は、ドーキンスの説を認めているが、小説家としての石黒は、純系化した生物を想像することで、「遺伝子を保存し未来に運ぶための容器物」ではない生物を描き出した。これは、石黒の研究テーマである癌の転移に遺伝子がどう関わるかということとの関連で言えば、生物学におけるア

ポトーシス^{註10}（細胞の自殺）の概念を、種に適用したものであるとも言えよう。

また、「この本を読まれた方へ」の中に「我々個人の行為規範も遺伝子によって規定されている。我々の行為原則とは、すなわち『自己の遺伝子の保存と繁栄』である。（中略）自殺をしてしまう人間はその例外のように思われるかもしれない。しかし、ネズミでも一つのケージに過剰な数のネズミを入れると共食いを始めることから、人間の場合も、過密社会の中での人間という種の保存のための調節機構の一つと考えると自殺という例外さえも、遺伝子が担っていると考えることができる。最新の研究では、一見繁殖に逆行する同性愛さえも、遺伝子的に規定されている部分があるのだ^{註11}という」とある。生命現象とは、遺伝子に規定されているものであるという考えを石黒が持っていることが分かる。

生命現象を遺伝子に還元して捉えようと、明解ではあるが、複雑な生命の謎の部分も依然として残る。また、そのような視点で人間を捉えた場合、人間の思想そのものへの波及的な影響についても考慮する必要があるだろう。あるいは、心を持ったヒトは、遺伝子の束縛を越えている存在ではないのかという疑問も残る。例えば、木下清一郎は『心は遺伝子をこえるか』（平8、東京大学出版会）の中で、「私たちのからだ

が、遺伝子の指示にもとづいて、すみずみまでつくられていくことはまちがいないところであり、心のあらわれてくる場である神経系についても、やはりそのとおりであろう。しかし、素材が遺伝子の支配下におかれているからといって、その機能までもが遺伝子の隷属下にあるとはかぎらない。私たちの心のもつみずみずしい感性、強靱にして柔軟な思考力、豊かな感情といったものを考えるとき、私は、心に秘められた新しい可能性を、遺伝子・細胞・個体とつらなってきた有機体の系列がもう一段高い次元へ飛躍する、その可能性を、たしかに感じずにはいられない」と述べている。このような点について、石黒の見解はまだ明瞭に示されているとは言えないし、作品としての形象化についても同様であろう。ネズミに関わる登場人物の葛藤や苦悩という、従来の文学が得意としてきたところで物足りなさが残る所以である。

また、「この本を読まれた方へ」の中には、「DNAはより高度の自己防御システムを持ち、不良品である我々人間を消滅させ、もつと進化したコンセプトに基づく合格品を作りだそうとしているのかもしれない。しかも、そのために必要な数万年という気の遠くなるような時間は、DNAにとってはごく一瞬のことなのだ。しかし、もつとエスカレートさせて、DNAは自己崩壊システム自体を内包してしまっているのか

もしれないと仮定することもできる。DNAは自らの消去さえもその中にプログラムしてしまっているとする考えである。それに従ってただ一本道を進んでいるだけの人間は、加害者ではなく、実は壮大な実験に参加させられているだけの被害者なのかもしれない」とある。

「この本を読まれた方へ」の中に記されたこれらの言説は、作者の意図と読者の理解の空隙を埋めようと、創作主体である石黒による自作自解の試みと読める。だが、このような長い「あとがき」を必要としないところまで、作品そのものの表現を徹底させるべきだっただろう。つまり、ハネネズミの寓話を、人類全体の繁栄や滅亡との関連で描き出そうとしていたのであれば、進化の途中にあるヒトの描き方に一層の工夫が求められただろう。ヒトの描き方に徹底さを欠いたために、多義的な読みの可能性を残している。例えば、人類の繁栄の犠牲となったハネネズミの悲劇ということが意図されていたのだとしても、加害と被害の関係が不明瞭なため、その構図が充分には浮かび上がって来にくい。あるいは、別の読み方として、ハネネズミに人類全体の滅亡の寓意を読みとることも難しい。もつとも、このような主張のメガホンとして露わに表現されてしまえば、それはもはや文学とは言えなくなっていただろう。

なお、このあとがきには、石黒の遺伝子について持っている考えがストレートに表明されており、興味深いものがある。つまり、遺伝子が意識を持つていてのではないかということ、及び「DNAは自己崩壊システム自体を内包してしまっている」という仮説である。

榊佳之は、山折哲雄との対談「分子生物学がもたらす老化と死の意味と死生観」(NHK「人体」プロジェクト編『驚異の小宇宙・人体III遺伝子・DNA』④)平11、日本放送出版協会)の中で、「進化の観点から見れば遺伝子は『絶えず動き回って引つ掻き回されているものである』と、私たち(分子生物学者——引用者注)は見ています。私たちは人間という形で何万年か生きてきていますが、遺伝子の組み合わせは絶えず変動しているわけです。この地球という環境の中で生き延びられるかどうかは、遺伝子の組み合わせで決まってくる。人間はそれに非常にフィットしてきた生物ですが、しかしまたどこかで違う組み合わせが誕生して、それが人間以上に発達するかもしれない可能性を常に秘めている。人間が現在もっている遺伝子のセットは、そういう意味では仮の途中過程で、これが完成されたものだと思うのは、人間の思い上がりもいいところなんです。組み合わせがどんどん変わっていきけば、もつとすごい生物が生まれるかもしれない」と述べて

いる。

『新化』の「おわりに」の中に、「『新化』は主として分子生物学における遺伝子操作の問題を扱っています。遺伝子操作は倫理との摩擦が問題になり、我々の多くは倫理にテクノロジを従える形の進歩でなくては容認できないと感じているわけですが、倫理そのものが技術革新によって変化していく可能性があります。人間が自分の遺伝子に手を加えることが倫理に反するのだとしても、自分の病気を子供に伝えないようにすることまでも倫理に反するのかどうか、非常に難しい問題です」とある。ここでは、倫理が遺伝子操作の技術革新に伴って変化する可能性があることに言及している。「新化」では、エンジェルマウスの近親交配によって、ハネネズミを作り出せないかということが実験されている。また、「生体時計とも呼ばれるテロメア」を操作することも検討される。

なお、「新化」には、「Anerypy (アネルピー)とは、石井氏が通常の進化の方向(鳥類からほ乳類への進化)と反対の方向に進む進化を表す言葉として、自ら作った造語」とある。ただし、池田清彦の『さよならダーウィニズム』(平9、講談社)の中に「系統発生学によれば、脊椎動物の系統は、魚類から両生類が出て、両生類から爬虫類が出て、爬虫類の一部は哺乳類に、一部は鳥類になった」とある。爬虫類

が枝分かれして哺乳類と鳥類になったのであり、鳥類から進化して哺乳類となったわけではない。それでも「新化」では、ハネの生えていたネズミという希少生物を虚構化することで、その絶滅の悲劇を文学的に見事に形象化し得ている。

四

石黒の小説では、登場人物が具体的な人間像として浮かび上がってくるようなところは少なく、むしろそのようなことは意図的に避けられている。具体的に起こった出来事を、ドキュメント風に記すことによって語らせるというところがある。また、遺伝子というものを、意識があるものとして擬人化して捉えている。

ヒト以外の生き物に生存を脅かされる寓話も目立つ。例えば、「カミラ蜂との七十三日」(平8)では蜂に、「その話、本当なのか」(平10)では、白蟻やゴキブリに脅かされる話が描かれている。前者では、「カミラ蜂絡みの病原体が関係しているのではないか」と推測され、後者では、白アリやゴキブリは「病原性の高いものではないか」、それらを駆除する薬の方が、人体にも有害ではないかということになる。白アリやゴキブリを、「既に進化し切った完全な生き物」「全ての生態系

から孤立している『神』に近い存在」と思う。

「新化」に見られるように、石黒は意識というものを、精神的なものというよりも、物質的なものと考えている。「十」でも、意識というのは、精神的なものなのか、物質的なものなのかということが問われている。

石黒は分子生物学を文学に導入することにより、無限に近い時間にわたって存続する遺伝子を主体に据え、人間を相対的、客観的に捉え得ている。しかも、DNAとしてのヒトという種を、絶滅を抱え込んだ存在として否定的にイメージ化して捉えている。

「最終上映」(平1)「ステージ」(平2)「十」(平6)「或る一日」(平11)にも顕著に見られるように、死から免れられない身体というものがリアルに即物的に描き出されている。それは、「死体がモノならば、生きている人間も脳の電気信号があるだけのモノだ」(「十」)に明瞭に示されている。また、医者という職業の特質については、「患者を看取れるようになったら一人前の医者だ」(「ステージ」)や、「患者の意識と動きを奪い、他動的に呼吸させ、人間を一度モノに近い状態にしてから治療する。それが患者管理だ」(「十」)に窺える。死について、解剖学者のように即物的、臨床的にリアルな捉え方をしている。また、遺伝子の視点から、すべての生き物を均

一に捉えるところがある。そのため、例えば、料理を「死体の加工に過ぎない」(「その話、本当なのか」と捉え、「果物も野菜も、みな一様に死体で、スーパ―には死体の山が溢れている」(同) というように独特の視点がある。

ハネネズミを扱った二つの作品では、主人公がハネネズミの研究をしていた者の「実験ノート」や関係者の証言を引用し、分析するという体裁をとることによって、いわばモノログとしてのテクストではなく、ダイアログとしてのテクストを作り出している。引用された先行するテクストを、主人公が検証するという形式を採りながら、モノログだけの語りではなく、ポリフォニーのテクストが形成されているとも言える。「実験ノート」は残されていても、本人が亡くなっているので肝心なことは分からない。当事者の苦悩や葛藤という従来の作家が好んで採り上げてきたものは、意図的に窺い知れないような構造になっている。

なお、「新化」の中に、「科学にはなじまないはずのハネネズミ研究における石井氏の方法論はなお科学的であり続けるしかなかった。それは彼が科学以外の方法論を持ち合わせていなかったからに他ならなかったからかもしれない」とある。これは、作品の中の石井についての説明であると共に、石黒の文学の方法についての説明としても適用できる。つまり、

医学から出発した石黒の文学は、その独自性を科学的な内容や方法や視点に求めざるを得なかったというところである。

注1 座談会「理科系の文学」旗揚げ宣言」(「中央公論」平8・5)の中で、石黒は、「僕も仕事の後、研究所に通ってガンの転移に関する遺伝子の研究をしているのですが、そこで扱うのは大腸菌とかシャーレのなかの細胞ばかりで、ときどきネズミに注射するくらいです。だから、対象を生物としてはつかめない。そういう世界にいと、何か世界観が違ってくる」と述べている。

注2 多田富雄・山折哲雄「人間の行方——二十世紀の一生、二十一世紀の一生」(平12、文芸春秋)の中で、多田は「哲学、文学、社会学といった人間に関するような勉強をする領域では、生物学を知らなくてどうして人間を理解できるだろうか、という気がします。文学や哲学を志す人には、遺伝子やDNAの知識は不可欠です」と述べている。

注3 「イスラム教の信者、ユダヤ教の信者、キリスト教徒など、神と終末の日とを信じ善を行う者は、その主のみもとに報酬がある。彼らには恐れも悲しみもない」(平6)の中にも、「戦いや争いは、人間の中に既にプログラムされた本能であることは生物学的に証明される」とある。そのことを踏まえて、湾岸戦争の内実が風刺的に描き出されている。

注4 小森陽一は、『文学がもつと面白くなる——近代日本文学を読み解く33の扉』(平10、ダイヤモンド社)の中で、「自然科学の専門的な知が、曖昧な形ではあれ、読者共同体の共有言語になったとき、文学はそこから多様な想像力の資源を汲み上げていくのである。現代小説の前面に、遺伝子や免疫やウイルスが登場してくるのもそのためなのである」と述べている。

注5 石黒は、「サイエンス的思考の下に」(「海燕」平7・4)の中で、「ま

まったく文学臭さを除いてみたものを作りたかった(中略)タイトルというのはうすぼんやりとした内容を何となく象徴しているシンボルみたいなものなわけで、まさに文学的と言えばあれほど文学的なものはない」と述べている。

注6 ジェレミー・リフキンは、『バイテク・センチュリー——遺伝子が人類、そして世界を改造する』(平11、集英社)の中で、動物実験の被害について、ギル・ラングリーの説に拠って、「遺伝子実験のなかで動物をいっそう苦しめる結果になりかねない問題領域」を列挙している。

注7 「新化」では、神居古潭が、「清潔な環境」として、「細菌の感染から免れ」たことが説明されている。

注8 ハネネズミの発光や涙については、日野啓三「芥川賞選評」(『文芸春秋』平6・3)や荻野アンナ「解説」(「新化」平12、ハルキ文庫)で肯定的、積極的に評価されている。

注9 生物の多様性については、E・O・ウィルソン『生命の多様性I』(平7、岩波書店)『生命の多様性II』(同前)に詳しく記されている。

注10 多田富雄は『生命の意味論』(平9、新潮社)の「死の生物学」の章で、「不死の細胞である癌の発生。エイズにおける免疫細胞の際限ない死。アルツハイマー病での中枢神経系の進行性の死など、いずれもアポトーシスが鍵を握る重大な病気である」と述べている。

注11 山元大輔『本能の分子遺伝学』(平6、羊土社)の中に、「同性愛をもたらすメジャーな遺伝子がX染色体長腕の先端、Xq28領域に存在することを暗示している」とある。また、中込弥男『遺伝子でまると、きまらぬこと』(平11、装華房)の中にも、「米国のNIH(保健省)のハマーによると、X染色体の長腕に同性愛に向かわせる遺伝子があるという」とある。